



中高生とともに差別と闘う

劇「ナツノオト」

吉成タダシ



あれから一年たちまして

八月も終わりとりました。

忘れもしない、一年前の八月三十一日。夏の最後に休みをいただき、一人のんびりと県南の海に出かけました。お天気も良く、午前の爽やかな、少し緩くなった陽射しのなか、夏に溜め込んだ体の熱を冷まさそうと、誰もいない海に一人浸りました。熱さや疲れが大海原に吸い取られていくようで、本当に気持ちよかったです。

ひと休みしようと砂浜に上がり、読書をしていたときのこと。本に熱中していたために気づかなかつたのか、視界の端に人影が：ビツクリして振り返ると、そこには十人ほどの団体様！「こんな所で何なさってるんですか？」と、美しい女性の方に問いかけられしどろもどろの私。「なな、なに？」と、状況を把握しようとしたときのこと。ニコニコ笑顔。夏の砂浜らしからぬ出で立ち。そして、カメラを回す数人の人。「あ、何かの取材か」と気づき、女性と会話を成立させようとしつつ、「どこの局の番組？」と注意深く見ていくと、某局「笑ってコラえて！」の「日本列島ツアーの旅」で、目の前にいる女性は、何と！女優の片平なぎささん！そのことに気づいて、拙著「ナツノオト」が翌日に出版されることを紹介し、その主人公も、「なぎさ」と伝えると、今度は団体様一同がビツクリ。「こんな偶然があるものか！」と、我ながら感心しました。

本放送後は、会う人会う人に、「そんな偶然あるわけがない。ヤラセだろ」と言われ続けたのですが、これが真相です。昨年の夏休み最後の、私の絵日記でした。

さて、その「ナツノオト」。生徒会からの要請があり、文化祭で劇として上演することと相成りました。本番は九月。昨年の出来事から約一年。限られた時間の中に脚本化しなければならぬ制約の難しさはありますが、せっかくだいだいた機会です。演じる中学生に、裏方の中学生に、関わり見てくれるたくさんの中生や保護者の方々に、少しでもハンセン病の問題をワガコトとしてみてもらえるよう、この夏、奮起してみようと思います。

劇「ナツノオト」

新年度になった今年の五月。若い教員二人が組んで、中学二年生六クラス百九十五人を前にし、人権学習にチャレンジしてくれました。昨年度、私が五回積み重ねてきた学年全体の人権学習です。今回初めて引き受けてもらえて本当ありがたかったし、嬉しく思いました。聞けば簡単なことのように思われるかもしれませんが、やったことのない教員にする、これは相当高いハードルのようです。自分が専門にしている教科の授業を見られるだけでも緊張するのに、人権に関して専門的な知識や理解を得る機会がなかったばかりか、授業をする技量を高める機会もないまま

に多くの生徒や教員に見られるわけですから、仕方のないことといえば仕方のないことかもしれません。ただ、いじめや被差別の当事者にすれば、「そんなこと言ってる場合じゃないでしょ！」です。だから覚悟して、でも余分な力を入れずに肩の力を抜いて、チャレンジしてほしかったわけです。こんなふうにして若い教員が進んで取り組み、子どもたちの心いつまでも残っていくような人権学習が当たり前になっていけばと思います。

今回、劇「ナツノオト」に取り組む生徒会メンバーのなかには二年生の子どもたちもいます。また生徒会担当教員は、五月に授業をしてくれた教員でもあります。少しづつ、本当に少しずつですが、人権文化が染み渡っていくようです。

フレッシュな感性で！

その五月に取り組んだ学年全体の人権学習のテーマは、これまで一年間、共に過ごした生活や取り組んできた人権学習を通して、自分自身を振り返ろうというものでした。

「私は今回、初めて自分の体験談をみんなの前で話しました。自分のことを言うのはとても緊張して、とても怖かったけれど、みんなに聞いてほしかったことなので、言えて良かったです。他の人も、それぞれに良かったことがあるようで、表面上笑顔でも、実は苦しんでいる人もいます。うことがよく分かりました。

食べ物も同じで、先生方が話してくださった「おにぎり」や「リンゴ」の例のように、悪い言葉を浴びせられながら成長すると、すぐに中身が腐っていきます。人間も同じように腐っていったらどうなってしまうのでしょうか。心を閉ざしてしまったり、不登校になってしまったりもいるでしょう。そうならないために、私たちはみんなで力を合わせてその人たちを助け出し、最初のきれいな腐っていない心を取り戻し、みんなが幸せになっていくことが大切だと思います。

授業後の生徒感想文です。昨年度もそうでしたが、今回も、子どもたちが自分の言葉で自分のことを語っていききました。友人関係で、家庭内で、部活動で体験した、悲しかったこと、苦しかったこと、嬉しかったことが連なるように語られていききました。それに触発されて、教員も自らを語っていききました。

なかでも「おにぎり」と「リンゴ」の話は、印象深く子どもたちに残ったようです。いずれも、二つ並べた片方にはプラスの言葉を、もう片方にはマイナスの言葉を毎日かけ続けていくとどうなるか、というものです。「おにぎり」は早く腐り、「リンゴ」は表面上は変わらないけど、切ってみると、黒く腐っていたというお話です。これが人間であれば……。若い教員には若い教員なりのフレッシュなアプローチがあるものだと感心させられた時間でした。